



TITLE:

<大會抄録>一四世紀イランにおける統治者の權威：ムザッファル朝の場合

AUTHOR(S):

岩武, 昭男

CITATION:

岩武, 昭男. <大會抄録>一四世紀イランにおける統治者の權威：ムザッファル朝の場合. 東洋史研究 1995, 54(3): 558-558

ISSUE DATE:

1995-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154530>

RIGHT:

盾した内實は胡漢對立の上に立つ至高な存在としての皇帝の追求という點で統合されていたことを指摘する。さらに崔浩事件の主因を考える際にもこうした帝權の性格を考えることが必要なことを論じ、そこに至る足掛かりとして事件の主因を民族間の矛盾に求める從來の定説では十全なる解答をなしえない疑問點を提示し考察する。

一四世紀イランにおける統治者の權威

——ムザッファル朝の場合——

岩 武 昭 男

イルハン、アブーサイード歿（一三三五年）後の混亂期に、イランの中南部を支配したムザッファル朝に關しては、これまで、ペルシア文學史において詩人ハーフィズとの關連か、もしくはイルハン朝史、ティムール朝史の前後の餘録としてのみとりあげられてきた。しかし、前者の見方に關しては、不十分な研究に基づく概説に過ぎず、後者の視點に關しては、イルハン朝のモンゴル支配とサファヴィー朝の成立を短絡的に結び付け、この時代を全般的に無視する傾向が強かったためであつた。

イルハン政權のアラブ系アミールの子ムバーリズディーン・ムハンマドが自立して成立したムザッファル朝政權は、イラン中南部の諸都市を順次掌握し、一時的ながらタブリーズをも制壓してイルハン後繼王朝のジャラーイル朝と拮抗する勢力に成長する。次代の

シャー・シュジャールの時代には、その權力がより確實なものとなる。兄弟間の對立が絶え間なかったものの、ティムール到來前のイランにおける最大勢力となつていたといえる。

今回の報告では、アッバース朝カリフへのバイア（臣從の誓約）など、この王朝が二代に亘つて行つた、イスラム政權として自らを權威づける政策を整理し、一四世紀イランにおけるイスラムと政權のかかわりに關し、近年研究の進みつつあるスーフィズムの展開とはまた異なつた展開を提示してみたい。

後期オスマン帝國の徵稅請負制に關する豫備的考察

永 田 雄 三

オスマン帝國史は、一六世紀末を境に前後二つの時期に分けられる。これまで一五・一六世紀の最盛期と一九世紀半ば以後の近代史とに研究が集中し、一七世紀から一九世紀半ばにいたる二五〇年ほどの時期はきわめて手薄であつた。しかし、近年この時期に關する諸問題が關心を集め、本格的な研究の進展が期待されている。社會經濟史分野では、とりわけ「チフトリキ」（「私的大土地所有」）の發生、發展、經營規模、農産物の市場化、そして、これらを經濟基盤として各地に勃興した地方名士（アーヤーン）層の動向などが注目されている。報告者もこれまでアーヤーン研究をそのチフトリキ經營を中心に進めてきたが、本報告では、アーヤーン層の權力基盤のいまひとつの焦點である徵稅請負（イルティザーム）を取り上